
一つの銃声

灯夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

一つの銃声

【コード】

N0501D

【作者名】

灯夜

【あらすじ】

戊辰戦争、大壇口に布陣した二本松少年隊。大藩の影と、時流に
よて翻弄され、それでも戦い抜いた主人公、そこに去来する思い。

勝利の無い戦いだとは、初めから分かっていた。けれど、他に道が無いことも。

竹の幹に当たった敵弾が、その空洞をカラカラと鳴らし、風を切って四散する。それらの弾は最後に、竹林の中に紛れて生えている杉の木や、土手にぶつかり、ようやくその勢いを止めた。

揺れる木々の梢、ざわめく音が一際大きく聞こえる。少し遅れて、舞い落ちる竹の葉。

先刻までの、大砲の轟音や、鉄砲の火薬が爆ぜる音は、いつしか遠くなっていた。

「ッッ」

太股の撃ち抜かれた傷からは、血が止め無く流れている。一面に敷き詰められた竹の枯葉の上に、朱の染みが自分を中心に広がっていた。

骨さえも打ち抜かれている。

もう、歩けない……それよりも、助かりはしないだろう。

気が回らないだけで、もう何箇所も被弾しているはずだから。

……無念だ。

我が藩の主力が、他の戦場から戻らぬうちに進撃を始めた新政府軍。残っていたのは老兵と、少年隊として訓練していた自分達。出陣後も撤退命令が出たりと、恭順か抗戦かで揺れていた藩政は、一人の家老様の発言によってようやく数日前に決まった。新政府軍に謝罪し恭順したとしても、幕軍の仙台藩と会津藩という二つの大藩

が連絡路のために攻め入ってくる、主力の戻らない我が藩は結局滅ぶ、相手がどちらかという違いしかない、ならば後世に汚点は残すな、と。

そしてこの日、まだ朝の残るうちに敵は攻め入ってきた。

我々が陣を張る大壇口は、元々は一面の田畑で場所が開けていたので、辺りの人が逃げ去った後の家々から畳を集めて、防壁を造り陣地としていた。初めの内は、榴弾によって敵の前進を止め、松林や人家の影に隠れる敵を粉碎し、姿を現せば、鉄砲にて打ち抜いたが、いつしか畳は敵の弾に引き裂かれ、隊の仲間も、弾を避けていくうちに、はぐれていった。激戦の最中、声を掛け合う余裕なんてありはしない、ただただ敵を撃つだけ。

その戦闘にあつて、自分はましな畳の近くに寝転がって弾を込め、畑道を進む敵兵を撃つた。掠めていく弾が風を切る甲高い音が途切れることは無く、地面や人家、ボロ畳に当たる銃弾の振動や土煙は、徐々に近づいて来る様だった。

寄せ手との数が違いすぎる。

思ったほどの恐怖は無かった、けれどその反面、功を上げてやるなんて心意気も。

ただ、まるで頭が馬鹿になってしまった様で、ひたすらに撃つという一つの事しか考えられなかった。

十数人を撃ち殺して、弾を込めた時、両側面から別の敵部隊が突撃してきた。陣形を立て直して迎え撃つ時間も兵力も無く、追いつてられるように近くの林に飛び込んだ。竹林の中を走りながら、狙いもつけずに鉄砲を後ろに向けて引き金を引いた。それが功を奏したのか、なんとか追撃を振り切つて、窪みに身を隠そうとした所で流れ弾に太股を撃ち抜かれた。敵の姿が見えなくなった安心感があったのだろうか？ 力が入らないのに、しっかりと痛みだけは激しく伝えてくる足は、多分もう使い物にならないだろうということが、誰に言われるまでもなく分かってしまっていた。倒れながらなんとか仰向けになり、大きく息を吐く。

傷を見れば、木の実程の弾の突き抜けた穴から、ジワリと血が滲み、その後は一気に止めど無く溢れ出た。

ちようどそんな時だ「隊長が撃たれた」との声が聞こえたのは。だけど、自分にはその声の方へと歩けるだけの余力は、もう無かった。

他の仲間はどうなったのだろうか？

二本松城へは、撤退できたのか、いや、よしんば撤退出来ていたとして、まだ持ち堪えているのだろうか？

そんなまとまらない思考で、浅く深く安定しない息を繰り返しながら、数日前の事を思い出す。

同じ隊の岡山が羽織を脱いで休んでいた時、その裏に名前が書かれているのを茶化したら『自分の死体が見つけれ易いだろう』などと冗談でもあるかのように笑って答えていた。自分の羽織の右袖を見て、その話を聞いた時に自分も名前を記しておくべきだったか、と考えて、今更詮無い事だなと、苦笑いする。

ああ、ここは、本当に静かだ。

隊長が撃たれたとの声以降、戦いの中心はここから離れてしまったのか、怒声も悲鳴も聞こえずに、間延びした間隔で流れ弾が通り抜けていくだけ。

生い茂る竹の梢を貫いて、真上から差し込む日の光に　もう、昼か、と心の中で呟き。しまったな、昼飯にとっておいた握り飯をどこかに置いたままにしまった、と努めてどうでも良い事に思考を傾け、震える指先で、残っていた弾を鉄砲に込めた。

勘、だけど、もうすぐ必要になるといいう、予感があった。

「子供か」

上から降ってきた声に、弾かれる様に顔を上げれば、横の藪の中から出てきた六人の洋装の兵隊に周りを囲まれた。おそらく、残党狩りの遊撃小隊だろう。

これまで、か。

反射的に、瞳を硬く閉じ、身を強張らせる。

さっきまでは忘れそうだった自分の鼓動が、酷く大きく聞こえる。早鐘を打つ心臓、皮膚の感覚もとても鮮明で、じつとりと湿ったさらしに袴の感触、顔を流れる汗、乾いた落ち葉、そういつた世界の全てが名残を惜しむように流れ込んできた。

「斬りますか？」

刀を抜いた金属音が響く。

「捨て置き、その傷ではどうせじきに死ぬ」

そう言った声は、素っ気無くまるで微塵の興味も無さそうだった。ゆっくりと瞼を開けると、背を向ける四人と、その後ろからこちらに顔だけを向け付いて行く二人が眼に入ってくる。

覚悟なんか、もうとっくに出来ていると思っていた。

けれど、その瞬間を覚悟し、瞳を閉じ、何とかして身を庇おうとした自分が滑稽で、あまりに情けない気がして、それを見て見逃した彼等があまりに傲慢に思え、そして何より最早無駄と知りつつも、この一瞬を生き抜けた事に安堵した自分自身が許せなかった。

他にどんな道が選べたのだろうか。

兵力の差は歴然だった、それでも戦うしかなかった。

死ぬしか、なかった。

出来たのは、いかにして死ぬかだけだった。

せめて、誇り高く。

最後に胸に到来した怒りのままに、もうほとんどいう事を聞かない体に命令し立ち上がり「痴れ者が！」と、叫ぶと同時に銃身を上げて、最後の力でその引き金を引いた。

爆ぜる火薬の音と、重すぎる衝撃。

それでも、笑う事が出来た。

これで、一つの不名誉も残さずに、ずっと、誇り高き二本松藩士であるのだから。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

史実に忠実となっではないかと思いますが、出来る限り資料を集め、当時の様子を想像して書いてみました。

今後の方向性や、作品に生かして行こうと思しますので、よろしければ思った事等御座いましたら宜しくお願いいたします。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0501d/>

一つの銃声

2008年11月7日06時39分発行